

鎌倉北条館『一切経』校合

きょうごう



『一切経』校合

関東絵伝(場面) 月夜の箱根峠超え

『口伝鈔』には「一切経御校合の事」として、鎌倉幕府の執権が催した宴席において親鸞聖人が魚鳥を食する際に袈裟を着用するか否かを問われ、聖人は袈裟を着用したまま食べることを説き、北条時頼(開寿殿)を納得させる場面が記述されている。

『一切経』校合とは、有力者が発願して『一切経』を写し、その写本に間違いがないか原本と照らし合わせる作業のことである。校合には聖人の他にも多くの僧侶が招集された。聖人が参加された『一切経』校合については諸説あるようだが、鎌倉幕府の将軍や執権の発願により「一切経会」が営まれ、その行事に関連して校合が行われていたようである。現にこの頃、執権北条泰時は『一切経』5千部を三井寺園城寺に寄進している。親鸞聖人が鎌倉幕府の命で『一切経』校合を行なったということを高田派が伝える『正統伝』『正明伝』には次のように伝えている。

六十一歳 六十歳八月上旬都に赴んとて、
相州足柄下郡江津と云う所まで登りたまう。
(略)

江津掛錫の中に、鎌倉にかよい、御勸化荐なり。
此時、鎌倉の元帥、北条家、一切経校合の法会あり。
則聖人を屈請して、文字章句を選ぶの師とす。

『正統伝』

聖人、六十余歳、北国関東の教勸成就して都へ登りたまう。相撲国江津と云所に、暫く滞留ましましき。是より鎌倉も遠からず、殊に始より教化の縁もあれば、時時にかよいてすすめたまう。其折ふし、鎌倉北条家、一切経を書写し、校合慶讃の法会あり、是は数多の知識を請じて修する法会なり。(略)

『正明伝』

このことから、親鸞聖人は高田(真岡市)や稲田(笠間市)滞在中に鎌倉に赴き、また、61歳の時(1233年)より、帰洛の途中の国府津(小田原)滞在の折りに鎌倉を訪れ、民衆を教化しつつ宗匠として『一切経』校合に参加していたことが窺われる。

鎌倉の「一向堂」

鎌倉幕府の命で『一切経』の校合に招かれた親鸞聖人は、鎌倉常盤(鎌倉大仏の北側)に建てられた坊舎に迎えられ、逗留されていたと伝えられている。現在、常盤の地には「一向堂」という地名がバス停や公園の名称に残っている。

鎌倉小袋谷にある成福寺(本願寺派)について『新編相模国風土記稿』の記述には、「聖徳太子木像一躰 親鸞、鎌倉常葉の坊舎にて午刻し…」とあり、鎌倉周辺の真宗寺院のなかには、当時の住僧がこの坊舎に親鸞聖人を訪ね、帰依し改宗したと伝えていることから、聖人が常盤(葉)に滞在していたことが想像できます。また常盤には、国指定史跡「北条氏常盤亭跡」があり、幕府の有力人物の邸宅近くに聖人がいたことも興味深い。

また、その後、聖人の孫である唯善(覚信尼の子)が、大谷本廟から親鸞聖人の真影を持ち出し鎌倉に下向した時に、この地に真影を安置していたことから、その真影は「常盤の真影」と呼ばれたようである。聖人ゆかりの地故に孫の唯善が居住していても不思議はないだろう。



鎌倉幕府における『一切経』校合

